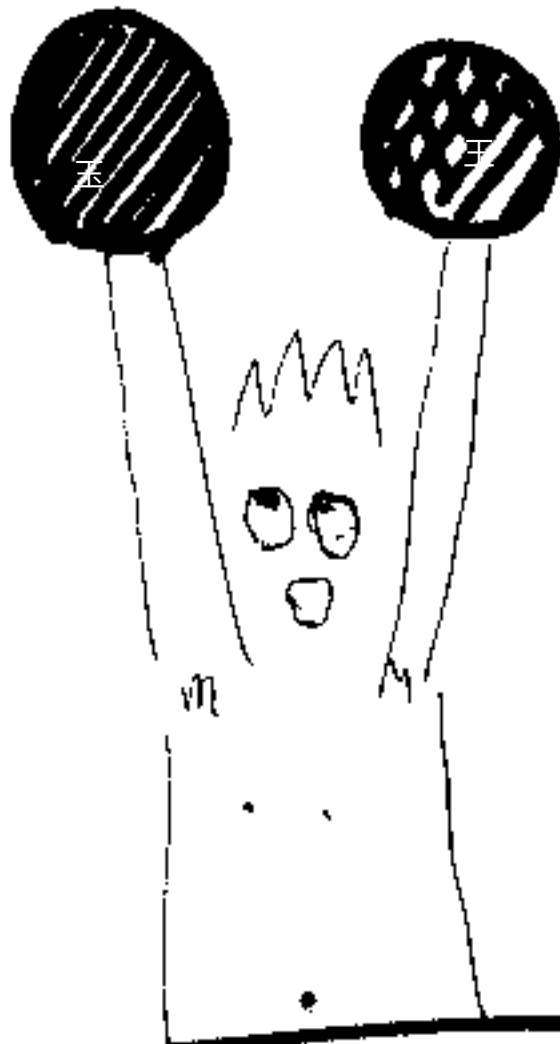
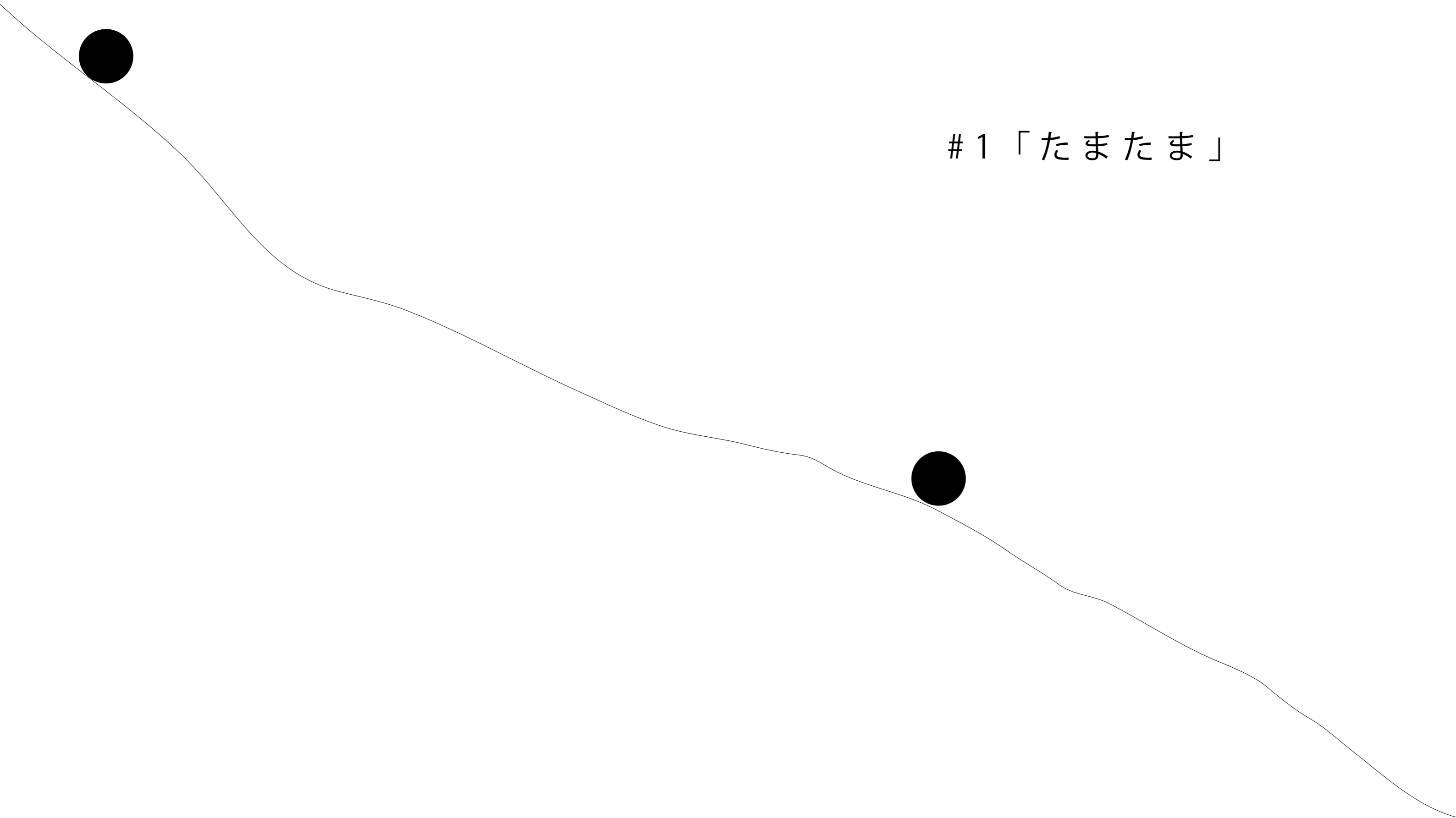


週刊

# たまたま、





#1 「たまたま」



2020年4月20日月よう

# アケミのともだちのひと



部屋にいる友達を見つめることがふえた。私たちは女の子同士だから気があう。二人のことをすごく可愛いって思ってる。服は一番はじめに着てたのがダサかったから、脱がしてどこかにやっちゃった。そういうわけで二人はいつもほぼ裸でいるけどそれも可愛い。二人には私のことも可愛いともだちって思ってもらいたいな。



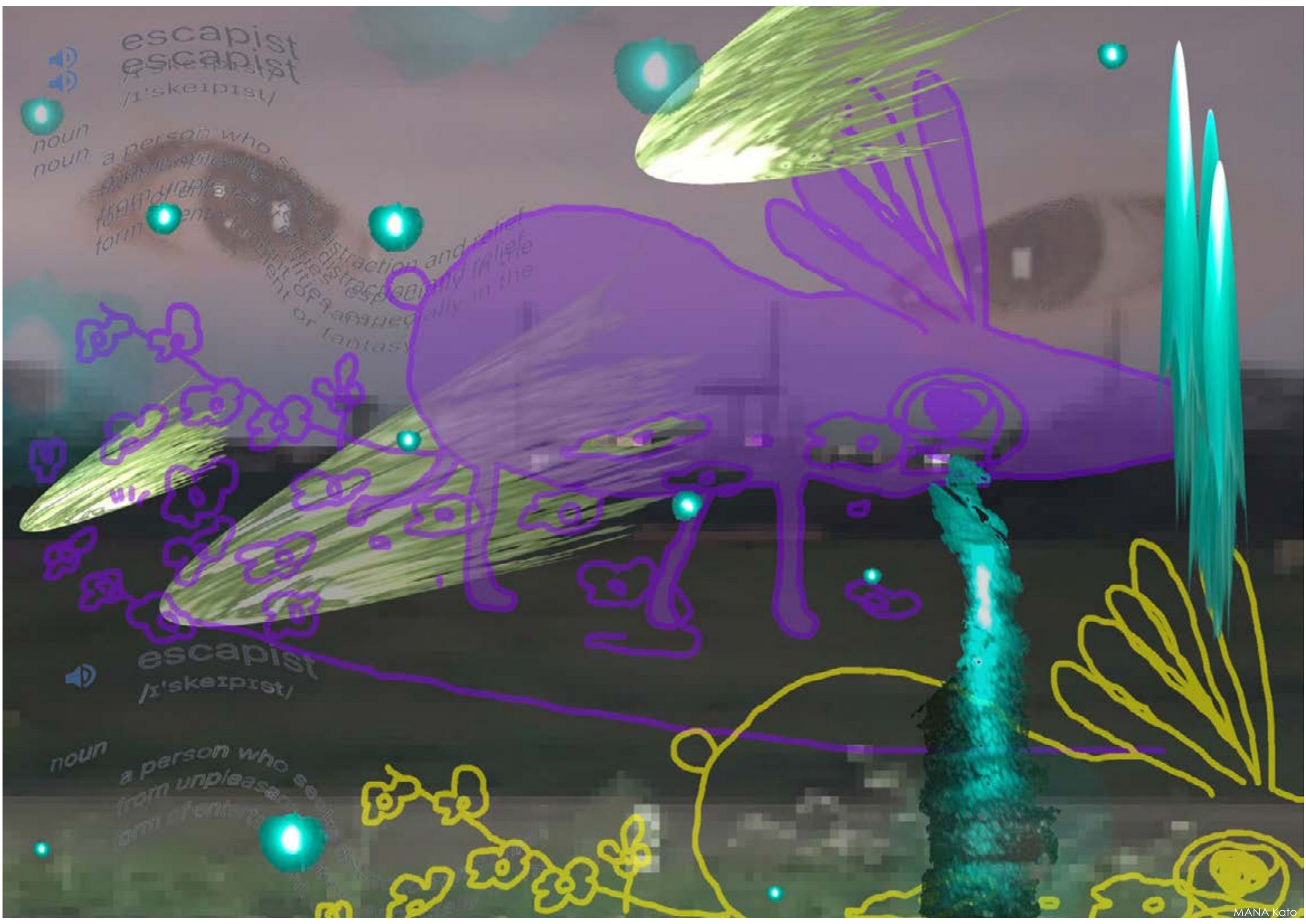
きつねにもものすごい量の夢をもらった、夢のはなし。

僕はドヒョンに置いてがれて、左に等身大のダルマが置かれた怪しい中は真っ暗なカウンターの前に立つとそこではその友人に会うため通らなければならなかった。そこでは頭の左斜め上からきつねがものすごい量の夢を僕の頭に注ぎ込んだ。頭に入りきらないほどに、僕はげっそりしてけいたろうくんショッピングモールの二階で会ったら、なにか機嫌がわるく僕の元を離れてしまった。一回にあるマックで、カウンターの待つ場所にでんわをしている人と135円がしたにばらまかれていて、でもその135円と電話している人は明かに無関係だった。無視をして僕は200円でなんか買おうとしたけど300円でちきちーとコーラが食べたくなくなった。100円拾っておけばよかったと後悔する。何か知らない友達にその夢の話をする。その人は真白なページをベッドの上に乗せて胸くらいの高さまで積んでいた。僕はこういうのを書いているんだ。って全部真白だから隣の友人がなんだこれ全然わからないじゃないかと頭のはてなが浮かんでいたけれど、僕はなんだか違かった。そのページに狐の夢の記憶がページ以外が真っ黒になって映画のよう一ページ一ページが再生された。1ページ一つの夢だ。僕はものすごい情報量だったのでそこで気を失っていたらしい。それから23:40に終電だと思っていたので駅にダッシュした。00:07が終電だったので、23:47の電車に乗ることになった。そこはなんだか前橋駅のようなだった。僕が高校時代知っているような制服をきた人たちであふれた。みんな真っ黒で黒い地下鉄で、目がぎろぎろしていた。駅内であるのに高校生たちはタバコを蒸して地面に捨てた。僕は怯いて、駅構内の壁に邪魔にならないようにしていた。電車が来ると乗り込むとドヒョンがいた。ドヒョンは、友人が罪を犯した罰として悪夢を持たされて闇色の洞窟にひたすらに歩き続けさせられ、亡くなってしまった友人の話をした。僕のなかでなんだか狐は僕にとって幸運を運んでくれる動物だと思ったが、悪夢を見せられていたのかもしれない。いや、僕は実際に生きているから、悪夢は虚実であるのかもしれない。しかし、僕は普段通り友人や見覚えのある場所に行っていただけなので。もしこれが悪夢だったならば、ただ見せられているだけに過ぎなかった。僕は何も動けなかった。その後村山にあって、夢を僕にくれようとしたけれど、床に落ちてしまった卵くらい興味が無かった。

2020/2/3 4:15

スタタカヤ





escapist  
escapist  
/ɪˈskeɪpɪst/

noun  
noun  
a person who seeks  
distraction and relief  
from unpleasant  
or fantasy

escapist  
/ɪˈskeɪpɪst/

noun  
a person who seeks  
distraction and relief  
from unpleasant  
or fantasy

コロナウィルスの影響により、自粛の日々が続く中、尼神インターの渚が好きになった。

彼女の存在は認識していたけれど、ついこのあいだ、たまたま何かで見かけて、それから渚のユーチューブチャンネル「渚のいっぷくチャンネル」を調べた。それから、フォローしようとすぐにインスタグラムを開いて、検索した。すると、わたしはもうすでにフォローしていた。それでひとつ思い出したのは、ガンバレルーヤの二人と一緒に”よしこが3分半以内にジュースを買ってくれるか”という遊びをしていた動画を見たことだった。しかし、いつフォローしたのか記憶にもなければ、しばらく投稿を見た記憶もなかった。

意識してからは、何か投稿されていれば写真から言葉まできちんと見ているし、ストーリーなどは何度も見たりする。ユーチューブの動画の配信も、配信された日に見るようになった。夜、眠る前に何となく開いてしまって、これを見たら眠るのが遅くなってしまうとわかっていながらも、見てしまう。最近、そんな日々が続いている。

昨日の夜、妄想をした。「もしも居酒屋で尼神インターの渚にあったら」そして「どこが好きなのか」と聞かれたら。

それを思いついたとき、彼女のどこが好きなのかを言葉にできないといけないという焦燥感に駆られた。好きなものは好きなのだと言いたいけれど、それはお互いに過ごした時間がない人同士の間では、説得力にかけると思ったからだ。

素直に綴っていけば、目、話し方、立って話すときに少し足の動くの感じ、楽しそうに笑うところ、生き急いでないところ、物怖じしないところ、芸人としての意識の強さが見えるところ。私にはない部分を感じる場面が多い。

ただ、見た目のごとくではなく、生き急いでないかとか、物怖じないかなど、内面の部分は私の勝手な印象である。芸人としての意識など私が決められるものでもない。

私はただ画面の向こう側に彼女を見ているだけである。

ただ、彼女を見るたびに、好きになっていく。より、好きになっていく。

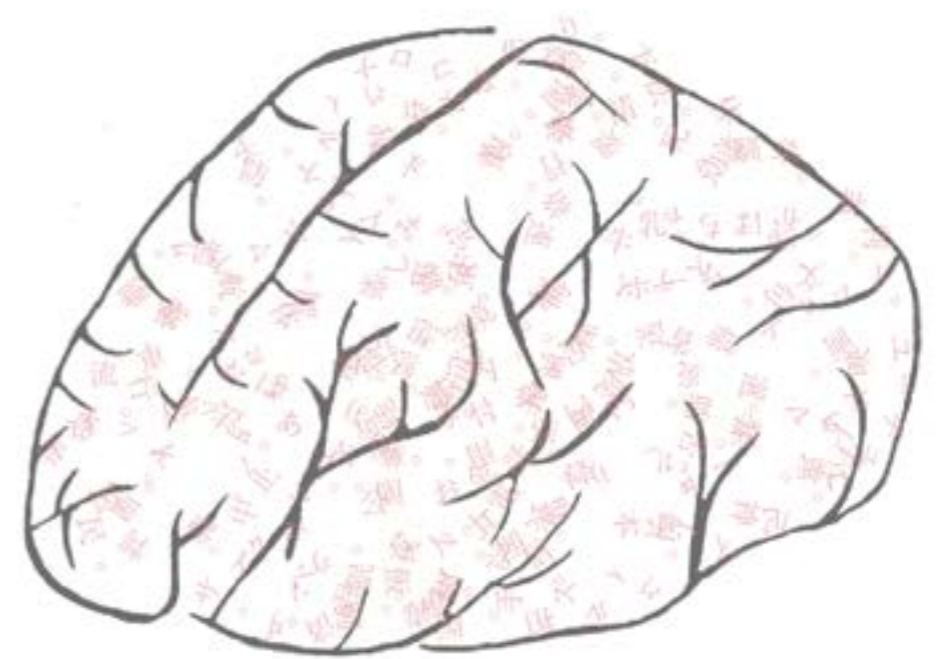
たのしい。楽しい。思い出すだけで、笑ってしまう。

わたしはひと段落したら、ユーチューブを見る。

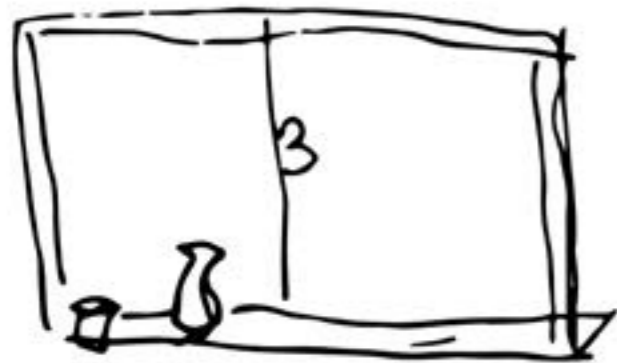
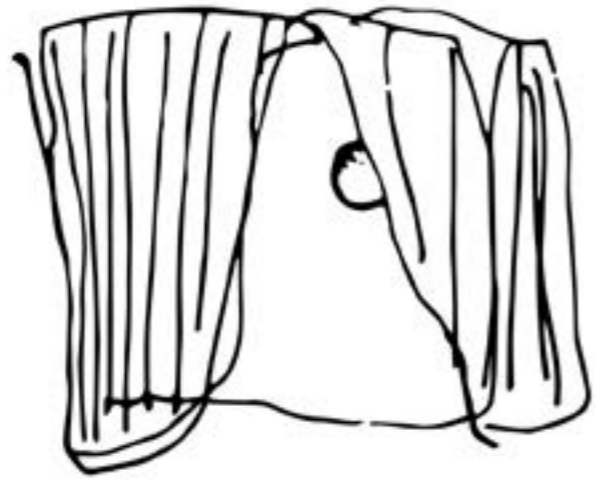
いま、身近にあるものにおいて、無意識にはじまっていたものばかりのように思う。しかしそれには、必ずはじまりがある。着実な積み重ねである。そしていつか当たり前になっているだけであり、私たちの最大で最低な武器とともに、共存していくようになる。

ちゃんと、なぜそうしているのかを自分自身の中でわかっていたい。

この現状が終息したら、元の世界に戻るのかな。

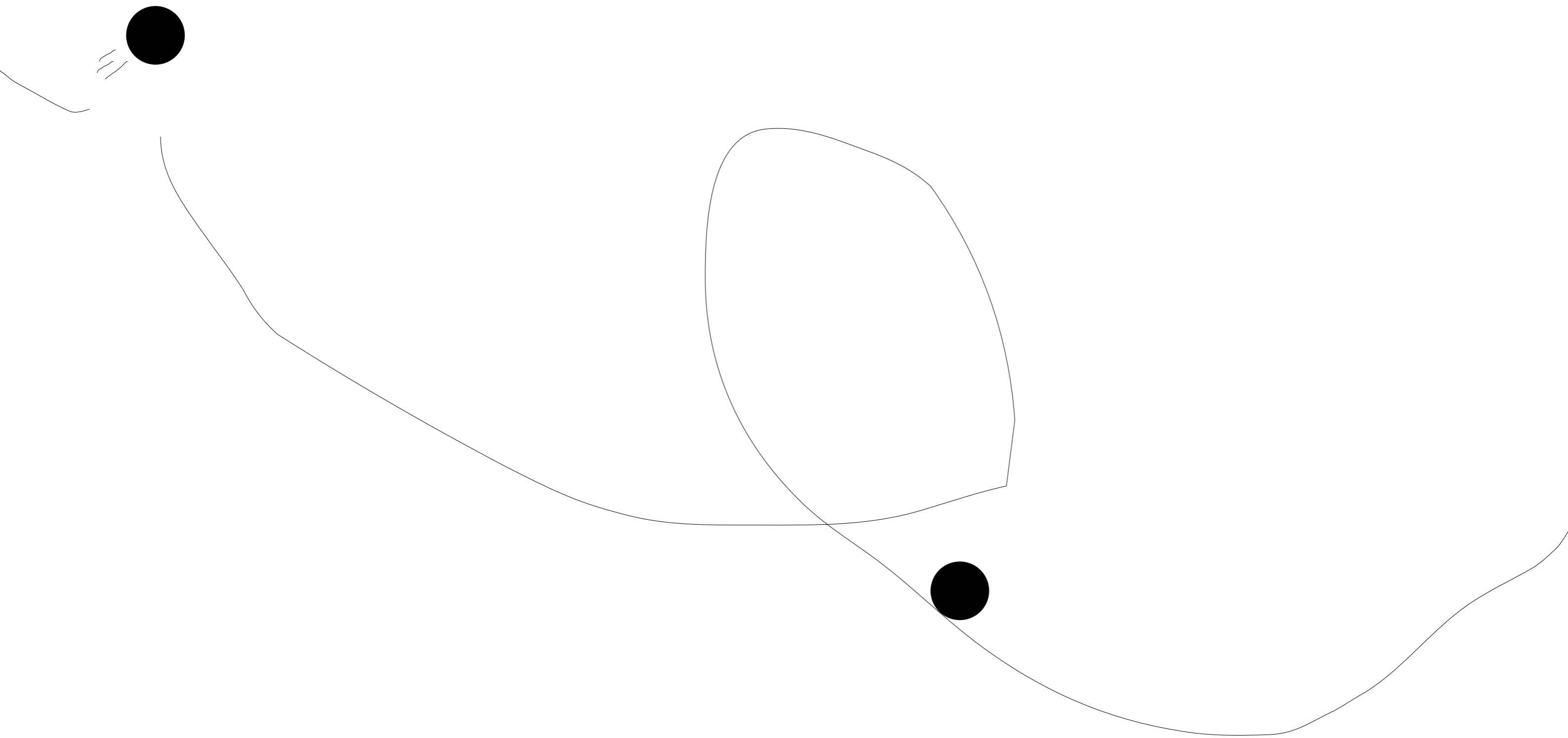


202001??-20200418





タ イ ト ル 週刊 たまたま、# 1 「たまたま」  
参 加 者 日高基、伊東あけみ、スタタカヤ、加藤真菜、桑原咲羽、下山健太郎、  
発 行 日 2020/4/17  
発 行 東京造形大学 CS-lab  
〒 192-0992 東京都八王子市宇津貫町 1 5 5 6  
編 集 下山健太郎  
印 刷・製 本 東京造形大学 CS-lab



編集後記：

たまたま、(偶々,)。いざ「たまたま」について考えようと頭の中で「たまたま」をぐるぐる〜と回してみても、ここ最近のたまたまにはぶつからず。球球は頭の皮を破って、床に「ゴゴンツ」って落ちた。鈍い音がして落ちた球球を見ていたらジョセフ・ジョスターの武器がアメリカンクラッカーだった事を思い出した。(つづく)

